

ブラジルサッカー事情

宮川 直也

サッカーのワールドカップ（W 杯）全 20 回の本大会に出場の唯一の国、決勝進出 7 回、優勝 5 回、本大会での通算成績 104 試合 71 勝 17 敗 16 分と、実に輝かしい実績を誇るブラジルの、現在のサッカー事情について述べる。

ブラジルサッカーの歴史と栄光と現状

ブラジルサッカーは、1884 年に英国系ブラジル人のチャールス・ウィリアム・ミラーが留学先の英国よりブラジルに持ち帰ってきた 2 つのサッカーボールが、その始まりと言われている。翌 85 年 4 月 14 日に、ブラジル最初のサッカーの試合がサンパウロで行われた記録が残っている。

今では考えられないが、当時は上流階級のスポーツとされ、サッカーが一般大衆の間に徐々に広がり始めたのは、1920 年代に入ってからである。30 年代にバルガス政権がスポーツ振興政策を取ったことも後押しとなり、サッカーは 33 年にプロ化が実現した。

W 杯で 5 回の優勝を誇るブラジルも、50 年代までは国際大会で目ぼしい成績は残せなかった。第二次大戦後再開された W 杯はブラジルで開催され地元優勝が期待されたが、199,854 人の超満員の観衆のマラカナンスタジアムで行われたウルグアイとの決勝で 1 - 2 の逆転負けを喫してしまう。Maracanazo として知られているいわゆる「マラカナンの悲劇」だが、この敗戦のショックは大きく、この決勝で使用された白色基調のユニフォームはもう二度と使用されることなく、その後の代表チーム（セレソン）の正ユニフォームの色は、カナリア軍団と呼ばれる現在の黄色と緑がベースとなる。

ブラジルがサッカー王国の地位にのし上がっていくのは 58 年のスウェーデン大会からであるが、歴代最高のプレーヤーの一人と言われるペレの出現と重なる。70 年メキシコ大会の第 3 回目の優勝まではペレをはじめ、ガリンシャ、ディディ、リベリーノ、トストンなど数多くのスター選手が出現、セレソンを栄光に導いた。ペレの引退後、ブラジルは W 杯の優勝から一時期遠のいた。82 年のスペイン大会では、ジーコ、ソクラテス、ファルカン、セレーゾの黄金のカルテットと

呼ばれたチームを擁してブラジル伝統の芸術的サッカーを展開、優勝間違いなしと言われていたが、準々決勝でカタナチオと呼ばれる守備的サッカーが伝統のイタリアに 2 - 3 で敗れてしまう。この敗戦がきっかけとなり、ブラジルサッカーはそれまでの観衆を魅了するような芸術的かつ攻撃的なサッカーから、結果を重視する官僚的なプレースタイルに豹変していったと言われている。ブラジルが再び世界の頂点に立つのは、ロマリオ選手が孤軍奮闘した 94 年の米国大会そして、ロナウド、リバルド、ロナウジーニョを擁した 2002 年の日韓大会であるが、特に 94 年のチームは官僚的サッカーの典型と見られ、優勝したとはいえ国民の評価は今一つ良くない。6 度目の優勝を狙った 14 年の地元開催の大会では、準決勝で組織だった戦術的なサッカーを展開したドイツに 1 - 7 と記録的な大敗を喫しブラジルサッカーは再度、プレースタイルの変革を迫られることになった。



ペレもプレーした Santos FC のスタジアム

スター選手不在の現在のブラジルサッカー

つい 10 年ほど前まではスター選手の宝庫であったブラジルも、今では世界的な名声を誇る選手は、スペインのバルセロナでプレーするネイマール一人といっても過言ではない。特にストライカー不足は、セレソンの戦績にも影響を与えている。18 年の W 杯ロシア大会の南米予選では、6 月現在 2 勝 1 敗 3 分の勝ち点 9 と 10 か国中 6 位に低迷。上位 4 位までが本大会出場の権利が与えられ、5 位がオセアニア地区予選を勝ち

上がった国とプレーオフ出場、つまりブラジルは現在の6位ではW杯に出場できない。南米のライバル国のアルゼンチンがメッシ（スペイン・バルセロナ）、アグエロ（イングランド・マンチェスターシティ）、イグアイン（イタリア・ナポリ）、テベス（アルゼンチン・ボカジュニオール）と既に名の通ったストライカー、さらには新星のディバラ（イタリア・ユベントス）登場と数多くのスター選手を輩出、ウルグアイがスアレス（スペイン・バルセロナ）、カバーニ（フランス・パリサンジェルマン）と経験豊かな攻撃陣を擁しているのとは対照的である。ペレを筆頭に、過去にはジーコ、カレッカ、ロマリオ、リバルド、ロナウド、ロナウジーニョなど数多くのストライカーを輩出したブラジルにとってスター選手不足は寂しい限りである。以前はストライカーの宝庫であったものの、今では欧州の名門チームで活躍するのは、ゴールキーパーや守備の選手が中心となっている。特にピッチの両サイドに位置し攻撃を仕掛けるいわゆるサイドバック、日本の例で言うといタリアのインテルで活躍する長友選手のポジションには、伝統的にブラジルは優秀な選手を擁する。日本でもおなじみの、ロベルト・カルロスや、以前鹿島アントラーズで活躍したレオナルド、ジョルジーニョはもともとサイドバックの選手である。今日ではスペインのバルセロナで活躍するダニエル・アウベス、レアル・マドリードのマルセロが有名で、その他の欧州の名門チームでも多くのブラジル人サイドバックが活躍している。



Escolinha de Futebol

サッカー選手の育成

さて、有名選手になれば巨額の富を手に入れられるサッカー選手はブラジルの庶民、特に貧困層の子供達にとっては憧れの的であり目標でもある。しかしなが

ら、そこまで登りつめるにはサッカーがすば抜けて上手いだけではなく、運も必要となる。サッカー選手になる一般的なルートは通常、Escolinha de Futebolと呼ばれるサッカー教室に通う。そこには頻繁にサッカークラブのOlheiroと呼ばれるスカウトが足を運び、各チームが求めるキャラの選手を選びクラブのテストを受けさせる。テストは数日間にわたって行われる場合もあり、また一回のテストに参加する人数は50人程度、合格者は2〜3人と非常に狭き登竜門である。受講者はテストマッチ中、何とか目立とうと必死である。めでたく合格すれば、クラブの下部組織（合格者の年齢に即したカテゴリー）に属しプロ選手の卵としてその道が開ける。しかし、そこでも毎年一回の選抜テストで篩にかけられるので、選ばれたとはいえ厳しい道が待ち受けている。不合格した選手はまた元のサッカー教室に戻り、別のクラブのテストのチャンスを狙う。テストは何度でも受けることができる。



Santos FCの私設応援団 一写真はいずれも筆者撮影

ブラジルサッカープロリーグ

ブラジルは日本の国土の22.5倍、26州1連邦直轄区に分かれるため、プロクラブの数も数多くあり、正確な数を把握するのは困難である。クラブの財政状態により廃止されるものもあるから、なおさらである。毎年行われる各州選手権の1部および2部にリーグに出場するクラブ数を調べたところ、2016年はなんと624あった。サッカー王国として知られるブラジルも、地方によってはサッカー後進地方も存在する。クラブ数が多く名門クラブが存在するのは、経済的に発達したブラジル南東部と南部である。北部、中西部は後進地方とみなされている。北東部は全国的に見て強豪クラブは少ないが、地元の名門クラブ同士の対戦となれば、その熱狂的なファンにより観客動員数は多い。先

進地方の南東部、南部でもサッカーが遅れている州がある。例えば、クラブ数の最も多い南東部でも、エスピリト・サント州には全国的に名の知れたクラブは存在せず、後述するブラジル全国選手権の2016年の1～3部リーグには同州のチームはいない。

さて、ブラジルにおける年間の国内大会だが、州選手権、全国選手権（1～4部）とブラジルカップの三つの大会に大別できる。2016年の例で言うと、州選手権は1月の末から5月8日の間、全国選手権が5月14日から12月4日まで続き、その合間にブラジルカップが3月16日から11月30日まで行われる。非常に過密スケジュールで、選手は休む暇もない。オフシーズンは全国選手権の終了から翌年の州選手権の準備が始まる1月上旬までの、1か月間がよいところ。強豪クラブとなれば国内大会以外にも、南米のクラブチャンピオンズリーグコパ・リベルタドーレス、あるいはUEFAヨーロッパリーグに相当するコパ・スタメリカーナに出場することになる。ブラジルの国内大会だけでも強豪クラブとなれば、年間70～80試合消化することになる。隣国のアルゼンチンのクラブチームが年

間45～50試合消化するのに対し、いかにブラジルで試合数が多いかがわかる。

王国復活となるか

地元W杯の準決勝でドイツに1－7と敗れて以来、国民のサッカーに対する関心、期待が薄れたように感じる。ブラジルは再びそのプレースタイルの変革を求められているが、果たして個人技に加え戦術的に優れたサッカーができるか、ロシア大会出場に向け大きな試練が待ち受けている。

（みやかわ なおや ブラジル在住20年、ミナスジェライス州アルフェナス市在住）

（注）文中の現役選手の所属チームは2015～16シーズン終了時のもの。

ラテンアメリカ参考図書案内



『「野球移民」を生みだす人々 ドミニカ共和国とアメリカにまたがる扶養義務のネットワーク』

窪田 暁 清水弘文堂書房

2016年2月 268頁 4,300円＋税 ISBN978-4-87950-621-4

サッカー、ゴルフ、ボクシング、相撲などのプロスポーツ選手の国際移動を移民現象としてとらえ、ドミニカ共和国（以下 ドミニカ）から米国等へ送り出された野球選手たち「野球移民」がどのように誕生し、複雑・流動化する現代にあって送り出した社会との関係の中での生き様を考察した、スポーツを介した国際移住の試論。

ドミニカに野球が伝搬し、米国野球の大リーグ（MLB）による野球アカデミー創設などの選手リクルート・システムが確立していく過程、野球がドミニカの人々の価値観に合わされ実践されて「ペロータ」（スペイン語で球）という独自文化になっていて、それが移民とともに越境し移住先の米国において定着していること、幼い時からペロータに馴染んできたドミニカ出身の大リーガーが、出身共同体（バリオ）への富の還元を通じて扶養義務関係が続いていることなどを、多くの事例フィールドノートを交えて明らかにし、移民を送り出している社会との相互交渉の連続性を位置づけたスポーツ人類学の新しい方法論により、「野球移民」を通してドミニカの人々の生活世界を描いている。

（桜井 敏浩）